激闘！バトルドッヂガール

茜　空

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バトルドッヂガール。

それは最近よくある美女や美少女達ばかり登場するソーシャルゲーム。

細かいルールの違いは色々あるものの、基本はただのドッヂボールと変わらない。

しかしこのゲーム、普通のドッヂボールと決定的に違う点が二つある。

必殺技の存在と、着衣ブレイクだ。

この世界ではドッヂボールが大人気であり、ドッヂに強い者は憧れの存在だ。そして美女や美少女達が、しのぎを削り、己のプライドをかけて闘うのである。

そんな世界に一人の男……いや、女の子が転生を果たす。

女の子は気づいていない。ここがゲームの世界だと。

女の子は気づいていない。自分がぶっ壊れ性能を持ったチートキャラだと。

目次

～プロローグ～　なんぞ、これ？ —— 1
～プロローグ～　友親、気付く —— 6

～プロローグ～　なんぞ、これ？

「……なんぞ、これ？」
そんな言葉が思わず溢れる。
今、俺の目の前で行われているのはドッヂボール。……ドッヂボール、のはずだ。
「くらえっ！烈火球！」
「きゃあああ！」
「白井選手、アウト！」
相手の選手（美少女）が結構恥ずかしい必殺技名を叫びながらボールを投げる。しかしこれが実際男も真っ青な豪速球で、しかも言葉通り炎を纏いながら僕の近くにいた美少女を吹っ飛ばす。
吹っ飛ばされた少女は、最近の大人の男性向けのゲームのサービスシーンの如く、服をボロボロにしながら吹っ飛んでいった。
「……なんぞ、これ？」
僕は再び同じことを呟く。
コロコロ……
目の前にこぼれ球が転がってきたので、それを拾いあげる。
「みんな気をつけろ！決勝で出てくるってことは相手の秘密兵器の可能性が高い！」
えぁ!?僕!?僕そんな大そうなもんじゃないんだけど!?
「すまん指宿（いぶすき）」
「後は頼む！」
「やっちゃえ友親（ともちか）ぁー！」
え？僕が投げるの？マジで？素人の僕が？無理無理（諦めモード）。
よし、外野にパスしよっと。
……あの、そのめっちゃ期待した視線やめてもらえます？すごくパスしにくいです。ええい、観客も煽るんじゃない！ますますパスしにくくなるだろうが！ってそうですよね。そんな雰囲気でもパス警戒しますよねぇ？ライン側に一人配置しますよねぇ。
クソが！パスって選択肢完全に潰されてるじゃねーか！

「もう、どうなっても責任持ちませんからね？」
僕は半ばヤケクソになって助走を始める。
「ふっ!!」
そしてありったけの力とストレス（笑）を込めて全力投球。するとボールがまるで僕の思いを投影したかのように真っ黒になってバチバチっと不穏な音を立て始め、相手選手へと飛んでいく。
「きゃあああああ！」
「真田選手、アウト！」
そして狙ったさっき必殺技を叫んでた美少女を、服をビリビリに破きながら吹っ飛ばした。
「なっ!?」
「必殺技!?」
相手チームから驚きの声が上がる。
「ふぁっ!?」
投げた僕も驚く。なんだ今の？
「友親かっこいー！」
「あの子、まだあんな技隠してたのか」
「漆黒の暴君と名付けよう！相手は死ぬ！」
「死んでないから！死んでないからね!?」
いや隠してないから！偶然だから今の！
あとなんだその俺の考えた最強の必殺技みたいなの！やめてめっちゃ恥ずかしいから！それと死んでないから！色々見えそうで見えない格好だけど死んでないからねあの子！
ってか復活早いな！もう立ってピンピンしてるよ。ただね、こっちを見ながら外野に行くのやめてくれません？視線がめっちゃ痛いです。
「もっちー！」
そんな追いつかないツッコミと絶賛錯乱中の僕に時間は非情で、試合は待ってくれない。外野の仲間から容赦なくパスが飛んできた。まだこっちの攻撃ターンは続いているらしい。
いやこっちにはパスしてくるんかーい！誰か倒して戻って来てく

れないんかーい！内野に残ってんの今の僕だけなんですけど!?いやまあ相手も最後の一人なんだけどさ。
ってかパスも高い高い！なんつーパス送ってくるんだよ。
「パスミスだ」
相手の外野選手からそんな声が聞こえてきた。
「あーもう！」
ちょっと今この状況を整理させてくださいやがれこのヤロー！
僕は自分を超えて相手の外野まで飛んでいってしまいそうなパスをバックしながらジャンプして空中でキャッチ。
「うそっ!?」
「あれに届くのか!?」
相手の外野の驚く声に思わずニヤリとしてしまいながら、僕はそのまま相手コートに残る最後の一人に向けてボールを投げつけた。今度はちゃんと特殊な投げ方と、イメージを込めて。
僕の投げた球は青白いスパークをしながら雷のように直角した軌道を取りつつ、高速で相手へと肉迫し、
「きゃあ！」
「武田選手、アウト！」
やはり吹っ飛ばした。衣装をビリビリと破きながら。
この衣装しょっちゅう破れるっていうか破れ過ぎじゃないかな!?しかもなんで毎度毎度、あんな都合のいい破れ方するかな!?いつも肝心な所は絶対見えないように破けるっておかしくない？
「試合終了！愛和北中学の勝利です！」
そんな僕の疑問は、最後の一人を倒したことによって試合終了と、うちのチームの勝利が宣言されたことによって流される。そして。
「やったぁぁぁぁ！」
「勝った！勝ったよもっちー！」
「私達優勝だよ！信じられない！」
宣言と同時にチームメイトが次々に僕に向かって走ってきては抱きついてきた。
「ちょ待っ!?ぐぇぇ、苦しい！ギブ！ギブ！」

次々にくるチームメイトを支えきれずに押し倒されて潰される。
何この柔らかビッグウェーブ!?
むにゅむにゅムニムニが押し寄せてくる！気持ちいいけど苦しい！苦しいけど気持ちいい！てかあんたら服ボロボロで色々見えちゃいそうだけどいいの!?目のほよ……じゃない、目の毒なんだけど！
「あ、ごめん」
「ちょっとみんなどいて！このままじゃ友ちゃんが潰れちゃう！おせんべいみたいになっちゃうよ！」
「あはは、ちょっと興奮しすぎたね」
そう言って乗っかってた子達が次々にどいてくれる。かわいい女の子たちに押しつぶされるという天国とぢごくから開放され、安堵とちょっとの残念感に浸っていたタイミングで、僕はヒョイっと身体を持ち上げられた。
「大丈夫だったか？」
「な、なんとか……先輩？」
僕を抱き上げたのは、うちの学校のドッヂボール部の部長にしてチームのキャプテン、灰川先輩だった。
心配してくれたのかと思いきや、先輩の笑顔に何故か背中に冷たい汗が流れる。
あ、これなんかやべえヤツだ。
妙な直感が働いて慌ててもがくも、身長の低い僕が高身の灰川先輩に叶うはずもなくひたすら空中でジタバタするだけだった。
「かっ、かわいい！」
「もっちー可愛いすぎる！」
「おりゃー撫でさせろー！」
「何食ったらこんな成長するんだこの胸！ちょっと寄越せー！」
「やぁーめぇーろぉぉぉぉぉぉ！」
僕の悪あがきがチームメイトの何か琴線に触れたらしく、みんなに揉みくちゃにされる。ええい、揉むな撫でるな抱きつくなぁぁぁ！
「まあ落ち着けみんな」
ここでさっき妖しいほどのいい笑顔だったキャプテンが止めに

入ってくれた。まあ事の初めは全部あなたのせいなんですけどね。だからジト目で無言の抗議をする。
「落ち着いたな。よし、じゃあみんなで私達を優勝に導いてくれた立役者を胴上げしようじゃないか」
「「さんせーい」」
はぁ!?ちょっと待て何言ってんだこの人!?こういうのは普通キャプテンの灰川先輩なんじゃないの!?さっきの嫌な予感の正体はこれかっ、冗談ではない!僕は決勝とはいえこれ一回しか出てないうえにただの助っ人なんですけど!?こんな場違い感半端ない胴上げなど御免被る!俺は抜けさせてもらうぜ!
指宿友親は逃げ出した!
じたばたじたばた
逃げられない!

僕は多勢に無勢、逃げることはかなわず、あっという間に持ち上げられると、空中へと放り上げられた。
「わーっしょい。わーっしょい」
「指宿、ありがとう!」
「ども〜ぢがぁ〜ぁ〜ぁ〜ぁ〜ぁ〜」
「もっちー!もっちー!」
何度も何度も放り投げられながら、僕は無駄な抵抗だったと悟り全てを諦めて、なすがまま状態で身体を委ね再び考える。そして最初に思ったことが自然に口から溢れた。
「なんぞ、これ?」

～プロローグ～　友親、気付く

僕は指宿友親（いぶすきともちか）。前世は男だが、現世は女に生まれてきたいわゆるＴＳ転生者だ。

で、転生といえば異世界とチートがつきもの。でも僕にはチートらしいものは何もなく、この世界も前世と何ら変わりなし。ま、それならそれで別にいいかと割り切り、僕は今新しい人生を楽しんでいる。

ところで今回の人生、なんかやたらとドッヂボールが流行っている。それも老若男女問わずに大人気。

学校じゃ休み時間や放課後はそこらじゅうでやってるし、公園やスポーツクラブのグラウンドなんかでもよく見かける。いい大人やお年寄りの方々がやってるのを見た時は流石にちょっと驚いた。おじいちゃんおばあちゃんが結構エゲツないボール投げてるの見たときは思わず二度見したわ（笑）

で、このドッヂボール、前世と結構ルールが違う。

基本的な所は前世とあんまり変わらないと思う。ただ、コート内での味方同士のボールの譲渡が認められているし、攻撃側はボールを投げる（？）方法が自由だ。頭を使おうが二人で投げようが蹴ろうが、一度ちゃんとキャッチしていれば何をやってもいい。

ついでにジャンプして相手コートに入っても、相手コートに足が着くまでに投げてしまえばルール違反にならない。ただ、自分のコートに戻るまではそれ以外の行動が禁止になるから気をつけないといけない。

あとは場所や相手によって特殊ルールの追加があるくらいかな。

なんだか昔あったバ○ルドッヂボールっていうゲームのルールに似ている気がしなくもない。

まあそんな感じだからみんな面白半分でいろんな攻撃を考えて仕掛けてくる。これが結構楽しいうえになかなか奥が深い。そういうわけで僕もこのドッヂボールにどハマりした。こういうのってあーでもないこーでもないと色々考えるのも楽しいんだ。必殺技とか考えちゃったりしてさ。

で、肝心のドッヂボールの実力の方はというと、実は僕、自分で言うのも何だけどチートレベルでかーなーり強いっ。学校や仲間内でも負けたことはないし、野良ドッヂやストリートドッヂなんかでも勝ちまくり。

この強さに予測不能の攻撃、あと低い身長と名前にちなんで「おもちゃ箱の親指姫」なんて呼ばれてちょっとした有名人らしい。

……いや、こういう二つ名ってかっこいいし、すごくありがたいし嬉しいんだよ。でもさ、わがままを言わせてもらえれば、もうちょっとこう、あったんじゃないだろうか？小さな巨人とか、ジャイアントキリングとか。

ま、まあとにかく、俺ＴＵＥＥＥＥＥＥってことだ。

んで、こういう流行りのスポーツって、強いと同性にも好かれるし、異性にもモテる。下からは慕われるし、上からは可愛がられる。

そう、今の僕は人気者でリア充なのだ（ドヤァ）

しかも容姿もベビーフェイスだがかなりの美少女で、人気にブーストをかけている。美少女って得だよな。

あ、もちろん自意識過剰じゃない。実際よく告白されるんだよ。男子にも女子にも。

……ただまあ、たまに「お兄ちゃんって呼んで欲しい」とか、「お姉ちゃんって呼んで」とか……いやまあ、結構、かなり言われたりもするけど。

このロリコンどもめ！

……あと容姿といえば、僕は男からしょっちゅうエロい目で見られる。

僕、美少女だしね（ドヤドヤァ）

まあそこも大事なことだけど、多分、ていうかほぼ間違いなく原因は僕の胸。おっぱい。

というのも僕のおっぱい、仲間内でもよくロリ巨乳とからかわれるくらいにはでかい。小三の辺りから育ち始めたこのけしからんモノは、今や立派な巨乳に成長した。しかもこれで僕まだ中学生。ってことはだ、こいつまだ成長の可能性があるんだよ。できればこれ以上大

きくならないで欲しい。マジで。……重いんだよこれ。
ロリ巨乳なんて漫画やアニメだけのもんだと思ってたけど、実在っていうか自身がそうなるのはさすがに予想できんかったわ。
まあただ、エロい目で見られる事に関しては別に嫌ってわけでもない。元男だから理解もしてやれるし。
ちなみにおっぱいは、わざとユッサユッサさせてやると男たちの反応がくっそ面白い。ガン見するヤツ、真っ赤になって顔を逸らすヤツ、股間を抑えるヤツ。特に最後のやつはめっちゃ草生えた。ああいう行動するやつ、実際にいるんだな。もちろん自重しような？とかエロガッパどもめ。とかニヤニヤしながら罵るまでがワンセットだ。
ああ、男たちをからかうのめっちゃ楽しい。
女子たちに白い目で見られて阿鼻叫喚な男たちを高みの見物で眺めているの楽しい。注目されるのって気持ちいい。ふふ、僕ってば悪女だね。
そんな感じで僕は第二の人生を謳歌し、中学生最初の夏休みに入る前。
「頼む。一回だけでいい。私達に力を貸して欲しい」
ずっと勧誘を受けて断っていたドッヂボール部の部長、灰川先輩に頭を下げられた。
もちろんドッヂは好きだし楽しいが、だからこそ僕は友達なんかとワイワイ楽しくやりたい派だ。
「お前ならうちのエースになれる！一緒に全国を目指そう！いや、お前となら優勝も夢ではない！」とかめっちゃ熱く勧誘されたけど、さすがに全国はそんなにあまくないっしょ。いくら僕が仲間内や野良、ストリートドッヂで強いって言ったって所詮はお遊び、御山の大将ってやつだ。僕くらいのレベルの選手なんてきっと全国にゴロゴロしてるって。
それに他の学校は知らないけど、この学校のドッヂボール部はかなりデカい。友達やドッヂ仲間でも何人か入部してるくらい部員数も多いし、部室も広くて専用コートなんかもある。学校側もずいぶん気合いの入れようだ。

そんな所にちょい強で調子に乗ってるエンジョイ勢の僕が入るのは色々間違ってると思うし、真剣に取り組んでいる人たちに失礼だと思うんだよね。

そんなもろもろの理由で勧誘を断ってたんだけど、先輩の、それもそんな部の部長に頭を下げられ、しかも一度だけなんて言われたら流石に断りにくい。ていうか断れるかこんなん。

「はぁ、分かりました。でも本当に一回だけですからね？それとお役に立てる自信ありませんからね？」

ということで一回だけ、助っ人を引き受ける事になった。

まあ引き受けたからには無様な真似はできないので、時々練習に混ぜてもらうようにはした。といっても僕は普通にドッヂボールに混ぜてもらうだけなんだけど。

ていうかみんな普通に僕を受け入れるからちょっとびっくり。こういうのって、出る杭は打たれるっていうか、体育会系の洗礼とかぶっちゃけちょっと覚悟してた。いや、こっちも別に空気悪くしたいわけじゃないからありがたいんだけどさ。むしろなんかめっちゃ可愛いがられるんですけど。まあ、いいか。

我が人生に一片の問題なし。

ってことで日々楽しく過ごしながら夏休みに突入。ちょいちょい部活に顔出しながら夏休みを楽しんでいる時に、なんとうちのドッヂボール部、県大会を突破して全国大会出場を決めた。

やっぱりあった、全国大会（笑）

まあ予想はしてた。調べてみたら夏と冬にデカい大会があるらしい。

話を戻して、うちのドッヂ部、破竹の勢いで全国大会も勝ち進み、なんと決勝戦進出。

圧倒的じゃないか、我が軍（チーム）は！

もちろん学校総出で応援しに行くことになり、僕も応援と激励をしようと選手の控え室に行って、めっちゃいい笑顔の灰川先輩に迎えられて……僕はでかい会場のど真ん中のコートに選手として立っていた。

ホワーイジャパニーズピーポー!?僕、チームの応援にきただけだよね!?

そんなわけがわからない状態で試合が始まってしまい、今度はこっちも向こうも常識外れの球の応酬。しかもみんな異常に身体能力が高いし、当たった子の服は破けるしで僕の処理能力を完全に超えて脳がオーバーヒート。で、半ばヤケクソで挑んでみればさらにまさかの決勝弾を決め、現在胴上げされてる真っ最中。

ってああ、そういえば灰川先輩と一回だけの助っ人の約束してたわ。ここまで考えないと思い出せないって僕相当テンパってたんだなぁ。……誰がこんな素人に決勝戦に助っ人頼むなんて思うよ!?完全に想定外だわ！しかも選手登録やユニフォームなんかの準備も完璧でスタメンとか言われれば逃げ出すに決まってるわ！

もちろん用意周到な先輩に回り込まれてしまい、ドナドナされながら試合会場へ引きずられて行ったんだった。

うん、とりあえず決勝戦に無理矢理出場させられたことは思い出したわ。けどあのドッヂボールの内容だけはやっぱりわけが分からん。なんぞ、これ？

しょっちゅうバナー広告出てそうなどっかのソシャゲや美少女ゲームじゃあるまいし……あ。

あああああああああああああ!!!

謎のドッヂボール流行り

ゲームみたいなルール

ゲームやアニメでしか存在しなさそうなロリ巨乳という自分に、美女揃いの強豪チーム

何より

必殺技の存在と弾け破ける女子の衣服

線と線が繋がる。

バラバラだったピースが埋まる。

間違いない。ここは異世界だ。それも男向けの美少女ゲームみたいな世界。そこに僕は転生したんだ。

あ、ってことは僕のこのドッヂボールの異常な強さは、もしかして、チート？

マジか!?……マジかー。